

琉球大学学術リポジトリ

巻頭言：バイオマス資源の開発と沖縄

メタデータ	言語: 出版者: 南方資源利用技術研究会 公開日: 2014-10-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鮫島, 廣年 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002017488

〈巻 頭 言〉

バイオマス資源の開発と沖縄

去る4月2日より5日の間沖縄において開催されたバイオマス資源の利用に関する国際会議に講演の機会を与えていただいた國府田佳弘琉球大学教授その他主催者の方々に厚く御礼を申し上げたい。

また本会議において国内の関係研究者の方々のみならず、東南アジア諸国、ブラジルなどでバイオマスの利用に直面しておられる研究者らと親しく対話の機会を持ち得たことも喜ばしいことであった。

打続く2度の石油ショックによって日本ならびに世界の国々がエネルギー問題について深刻な対応を迫られたのはついこの間のことである。対策の一つは省エネルギーであり、いま一つは石油代替燃料の開発であった。我が国においても、通産省の指導の下に、新燃料油開発技術研究組合が1980年5月に発足したが、その目的は石油代替液体燃料の開発であり、その重要な一環としてバイオマス資源からの燃料アルコールの生産が上げられた。私の所属する協和醸酵工業(株)を含め18の会社がこのプロジェクトに参加し、以来3年余を経過した。

本計画を発足するにあたり重要な問題はバイオマス資源として何を選ぶかということであった。結局選ばれたものは稲わらとバガスであった。前者は米産国日本の潜在的資源であり、後者は我が国では沖縄県と南西諸島でしか生産されないが世界的にみれば非常に大きな資源である。更に魅力的なことは、バガスは製糖工場に自動的に集荷されるという特徴がある。石炭、薪等の代替熱源があればバガスは糖化し、更に発酵法でアルコールに変換することができる。

現在私たちは参加会社との協力により、当社防府工場(山口県)内に原料の前処理から、セルラーゼ生産、糖化、発酵、アルコール回収、廃液処理を含む一連の総合ベンチ・プラントの建設を行いつつある。いずれ技術を完成し世界に披露せねばならぬと考えている。しかし問題はその後である。何処で実証プラントを運転し、何処で実用化するのかということである。勿論実用化は甘蔗の大生産国以外は考えられないが、実証プラント運転の場としては常に沖縄が脳裏に浮かぶのである。それは沖縄が我が国唯一の亜熱帯気候下にあり、また甘蔗の生産県でもあるからである。

私が今回の国際会議に参加した動機の一つは、その開催場所が沖縄であったということである。そしてバイオマスランド構想の発表に対して賛意を表明したのも、この考え方が私の日ごろの個人的考えと共通するものがあったからである。

技術の開発と、その実用化の間には尚多くの難題が介在していると思う。バイオマス資源特にバガスの利用については沖縄は実証プラント存在の場所としての要件は備えているものと思う。今回の

国際会議を機縁としてこの問題を更に多くの人々と話し合い、一步でも実現化に近づければ幸いである。

終りに本国際会議の間種々御厚意をいただいた沖縄の皆様に厚く御礼を申し上げます。(了)

協和醸酵工業株式会社
常務取締役 生産技術本部長
鮫 島 廣 年